

家庭科教員養成における 段階的模擬授業の分析 : 導入に焦点をあてた模擬授業

伊深 祥子*

中村恵美子**

1. はじめに

文部科学省ⁱ は、実践的指導力をこれからの教員に求められる力としており、教員養成の教科教育において、授業の実践的指導力を高めることが求められている。家庭科教育において荒井ら(2014) は、教員免許状更新講習のプログラムに模擬授業を取り入れ、山本ら(2014) は、教職実践演習で模擬授業を実施している。家庭科の現職教育および教員養成において模擬授業の意義が高まっている。

高木は(2007 a, 2007b)ⁱⁱ、家庭科教員として求められる6つの資質と能力を示して、模擬授業を分析した。高木は、模擬授業をとおして基本的な教授技術の向上を図ることはできたが、授業構成力、教材研究力、授業展開力の視点を具体的に意識してすすめていけるプログラムではなかったとしている。

堀内(2008)ⁱⁱⁱ は、家庭科の実践を分析的にとらえる着眼点があり、授業を省察できるようになることを目的に模擬授業を実施した。堀内は模擬授業へのコメント・レポートの実施により授業の疑似体験としての臨場感、事前準備から授業終了まで見通しを持つ、授業を解釈する視点を獲得することができたとしている。しかし、堀内はコメント・レポートの可能性を述べたうえで、「間接的」な手法であったことを限界とし、「直接的」な対話の場の設定を改善点としている。高木が指摘しているように基本的な授業技術と同時に、授業構成力、教材研究力、授業展開力の視点を具体的に意識することは難しい。本研究では、授業構成力、教材研究力の育成はつぎの段階の模擬授業の目的とし、基本的な教授技術の向上と授業展開力の育成を目的とする段階的な模擬授業を実施する。また、堀内が課題とした直接対話が交わされることの必要性から授業後に直接対話としてカンファレンスを実施する。

2. 研究方法・研究方法

2014年前期(4月~8月)の教員養成大学3年(41名)に家庭科授業研究で実施した段階的模擬授業を研究対象とする。模擬授業実施後の相互評価、カンファレンスの内容、および全員の模擬授業終了後の41名の記述を分析する。模擬授業終了後の記述のカテゴリー分析は2名で別々に実施し、相互の分析結果を照らし合わせてカテゴリーを抽出した。

* 愛知教育大学

** 愛知県西尾市立横須賀小学校

3. 先行研究における段階的模擬授業

高木（2007 a, 2007b）は、はじめに構想した模擬授業を改善する段階的な模擬授業に取り組んでいる。他教科では、春原・坂西（2010）が数学の教職入門で、グループ内で授業シナリオに沿ってロールプレイを実施してから模擬授業に取り組んでいる。体育の藤田ら（2011）は、2年次にマイクロティーチングを実施してから3年次に模擬授業を実施している。また、体育の福ヶ迫ら（2007）は教育実習後に、1人の学生が3回の模擬授業を実施し、他の学生は生徒役と観察役に分かれて授業の省察力を高めることを目的に模擬授業を実施している。

先行研究では、授業にはさまざまな要素があり、1回の模擬授業や教育実習だけでは、授業を実践する力をつけることが難しいと考え、段階的な模擬授業を実施している。しかし、指導案づくりと切り離れた模擬授業はみられない。先行研究では、基本的な教授技術の向上、授業構成力、教材研究力、授業展開力の育成が同時に実施されている。

また、高木（2007）、堀内（2008）は、20名以下の参加者全員による15分の模擬授業を実施している。春原・坂西（2010）はグループ毎に34名全員でシナリオのロールプレイを実施してから1時間分の模擬授業を代表6名が実施している。藤田ら（2011）は、32名が模擬授業を実施する方法として、12分ずつ4名で45分の模擬授業をリレー方式で取り組んでいる。全員が模擬授業を実施する方法が工夫されているが、授業の導入・展開・終わりに焦点をあてた模擬授業はみられない。

本論では時間（導入部分のみ実施）・内容（指導案づくりは実施せず既存の指導案を使用）・対象人数（少人数から人数を増やす）の3つの点で段階的な模擬授業を実施する。授業は様々な要素が複雑にかかわり合っている。要素を分解して実施することで授業が見えなくなることも考えられるが、要素を分解して授業が見えてくることもある。3つの点で段階的な模擬授業に取り組み、模擬授業後にカンファレンスを実施することで、基本的な教授技術の向上と授業展開力を育成することを目標とする。

家庭科教育の模擬授業の取り組みを表1に示す。1年次は教材研究を中心として模擬授業は実施しない。2年次はグループの代表のみの模擬授業を実施する。3年次で導入の模擬授業（本論）、4年次^{iv}で授業づくりを中心とした模擬授業に取り組む。

表1 家庭科教育における学年別段階的模擬授業

	授業の概要	模擬授業
1年次	教材研究	なし
2年次	授業分析	グループでの代表授業 シナリオでの授業
3年次	授業研究	導入の模擬授業 全員3分（既成の指導案）
4年次	教職実践演習	授業づくりと代表模擬授業45分

4. 導入の模擬授業の概要

はじめに4つの指導案から1つを選んで、ミニ模擬授業3分を実施する。例示した指導案は以下の4編^vである。

- ① 野田知子「食物繊維の授業」
- ② 増茂智子「人間の成長」
- ③ 海野康之「手縫いをしてみよう」
- ④ 鎌野育代「家族とのかかわり方はどう変化したのか・変化するのか」

ミニ模擬授業はつぎの4つのSTEPで実施する。

STEP 1：独り言で文字を話しことばにする。

なるべくゆっくり、ことばを選んで授業をするつもりで声をだす。

STEP 2：2人組でひとりを相手に授業をする。

生徒役は、発問の意味が分からなかったり、話すスピードが速すぎて聞き取れなかったりしたら指摘して、授業と会話の違いを体感する。

STEP 3：4人組で3人の生徒に授業する。

教師役は起立して生徒から少し離れて授業する。

3人の生徒を把握することを目的とする。授業後は2分のカンファレンスを実施する。

STEP 4：多人数に模擬授業する

教室の前後2つと別室の3か所に分かれて、各グループ13～14名に3分の模擬授業をする。多人数への黒板を使った授業となるので、模擬授業の前に板書計画を作成する。各グループでの模擬授業終了後には3分のカンファレンスを実施する。

多人数の模擬授業の1回目は模擬授業とカンファレンスの方法を学ぶために5名ずつ計15名の模擬授業を実施する。次回の講義から前半に各グループ3名（カンファレンスを含めて6分ずつ）が3か所で計9名が模擬授業を実施する。9名による模擬授業終了後は、模擬授業に関連した授業研究の内容の講義を実施する。家庭科授業研究の講義内容を表2に示す。講義では、模擬授業で課題となった「発表」と「説明」と「授業」の違いや発言しない子どもをどうとらえるかについて討議する場を設けた。また、模擬授業では板書案を作成するが、指導案の作成は実施しない。指導案の作成は講義の中で実施した。

表2 家庭科授業研究の講義内容

	模擬授業	授業内容	授業方法	模擬授業の人数	授業の重点
1		あなたの体験したよい授業	1人・2人・4人・全体交流		よい授業はひとつではない
2	★	Iミニ模擬授業をしてみよう	導入の3分の模擬授業：独りで言葉にする・2人組んで授業・4人組んで授業	全員	教師はなるべくしゃべらない
3	★	多人数を相手に模擬授業	14名前後のグループで3分間の模擬授業およびカンファランス3分。授業者のコメント2分。	5名×3	身体の使い方
4	☆	多人数に模擬授業	14名前後のグループで3分間の模擬授業およびカンファランス3分。授業者のコメント3分。	3名×3	予想しない子どもの発言
5	☆	発表と説明と授業の違い	講義の前半模擬授業 討議 発表	3名×3	教師の発話の種類
6	☆	発言しない子どもをどうとらえるか	講義の前半模擬授業 討議 発表	3名×3	子どもが表現する場をつくる
7	☆	グループの代表の授業	代表2名の全体での模擬授業とカンファランス	3名×2 +2名	自分らしい授業をめざす
8		最低の授業	4人グループで授業分析		この授業のどこが最低なのか
9		学習指導要領を翻訳する	グループで1項目を子どものことばに翻訳		子どものことばにしたものが授業の目標となる
10		指導案の書き方	展開部分の書き方		指導案は大きな流れを大切に
11		指導案の点検	2人組で指導案を交換して点検		評価の観点（子どもは何かができるのか・何がわかるのか・何を考えるのか）
12		授業の観察	教師を見る・生徒を固定してみる・生徒全体を見る		同じ授業でも子どもによって違う授業になっている
13		模擬授業「遊び」とは何か	生徒の表現で授業をまとめる	伊深模擬	授業のまとめの方法
14		講義のまとめ	この授業で学んだこと		教育実習に向けての課題
15		模擬授業「なぜひとりで食べるの」	生徒の立場から授業を分析する	伊深模擬	講義評価 講義の課題

★講義全体で模擬授業

☆講義前半で模擬授業

5. 結果

(1) 模擬授業の相互評価

表 3 に模擬授業後の相互評価の結果を示す。安心感、発話量、間の取り方、声の大きさ、表情、姿勢、身体の使い方の 7 項目について 5 段階で相互評価を実施した。5 名ずつ 3 グループでの 15 名の授業者に対する 36 名からの相互評価である。声の大きさ、表情、安心感は評価されているが身体の使い方、発話量が課題とされている。

表 3 模擬授業の相互評価

n=36						
安心感	発話量	間の取り方	声の大きさ	表情	姿勢	身体の使い方
4.24	4.06	4.13	4.35	4.25	4.12	3.99

15 名に対する 36 名からの相互評価
各項目 5 点で評価

(2) 模擬授業後のカンファレンスの内容

表 4 に模擬授業後のカンファレンスの内容例を示す。教師の発話、教師の身体、子どもとのかかわり方、授業の方法についてカンファレンスが実施されている。子どもとのかかわり方については、相互評価の項目に示さなかった項目である。発話方法、声、間、発話内容、行動、目線・表情、態度、板書、文字、指示、授業内容といった基本的な教授技術だけでなく、子どもとのやりとりがカンファレンスで取り上げられた。

表4 カンファレンスの内容例 (3つのグループのカンファレンスから)

A 教師の発話	発話方法	先生は黙っていてもいいんだと気づいた。	あまり滑らかにしゃべらない方がいい。
		しゃべり方が「～？」としり上がりだったのが気になった。	早口で周りが見えていない。
	声	一本調子の感じ、声の大小をつけたほうがよかった。	声の質がとてもよくて、聞こうという姿勢になれた。
	間	間が短くて急いでいるように感じた。待つことは難しい。	早くて子どもが考える暇がない。
	発話内容	答えが一つしかないことを聞かない。	生徒に「お願いします」は違和感がある。
		「どうだったかな？」という問いかけは抽象的な答えになってしまう。なんて答えるか難しい。	「知っていると思うけど」はよくない。
B 教師の身体	行動	身振り手振りがあるとよかった。	黒板のところはずっといないほうがよい。
	目線・表情	こっちをもっと見てほしかった。	意見を聞いた子以外にも目を向けることが必要。
	態度	落ち着いていて安心できた。	先生が楽しそうで、授業を受けている私たちも楽しかった。
C 子どものかわり方	子どものやりとり	生徒の発言にもう一つ質問して深めていた。	先生の反応がよかった。子どもを見ていて認めている。
		発言している子どもに頼っていた。	生徒の発言が予想外でも対応していた。
		「なんでだろうね。」は生徒と一緒に考えている感じがしてよかった。	黒板を書くときの姿勢と体の向きに注意が必要。
D 授業の方法	板書	字が大きすぎる。字が薄い。	言葉にしながらかき書くのはいい。
		生徒の発言を板書して欲しかった。	チョークの色の使い方がよかった
	文字	食物繊維はひらがなのほうがよい。	書き順が違っている。
	指示	生徒がすることをきちんと確認することが必要。	説明は短くする。2度説明しない。
	授業方法	生徒が盛り上がりつつも、大切な所でメリハリがつけられた。	グループで話し合いをする形式はよい。

(3) 模擬授業全体を終えた記述

①教師として・生徒として

全体の模擬授業後の41名の教師としての観点からの記述を表5に、生徒としての観点からの記述を表6に示す。教師としての観点からの記述は172項目、生徒としての観点からの記述は98項目である。導入3分の模擬授業では、教師としての観点からの記述が多く、生徒としての観点から模擬授業をとらえることは難しかったといえる。記述内容の分類をみると、教師の発話(30.24%)の記述が多く、つぎに子どもとかかわり方(27.91%)に関する記述が多い。教師としての観点からの記述、生徒として観点からの記述の両方で、教師の発話、子どもとかかわり方が指摘されている。また、教師としての観点からは教師の身体への記述は少ないが、生徒としての観点からは教師の身体への記述が多い。生徒としての観点から、授業では行動、目線・表情、態度など教師の身体について意識することが必要であることが示されている。

表5 全体の模擬授業終了後の教師としての観点からの記述

大分類	小分類	実数	%	小計%
A 教師の発話	発話方法	52	30.23	30.23
B 教師の身体	行動	5	2.91	12.8
	目線・表情	12	6.98	
	態度	5	2.91	
C 子どもとかかわり方	子どもとのやりとり	36	20.93	27.91
	誘導	12	6.98	
D 授業の方法	授業の方法	20	11.63	16.86
	授業の流れ	9	5.23	
E その他	緊張	21	12.21	12.21
総計		172	100	100

表6 全体の模擬授業終了後の生徒としての観点からの記述

大分類	小分類	実数	%	小計%
A 教師の発話	発話方法	34	34.69	34.69
B 教師の身体	行動	14	14.29	23.47
	目線・表情	5	5.1	
	態度	4	4.08	
C 子どもとかかわり方	子どもとのやりとり	23	23.47	27.55
	誘導	4	4.08	
D 授業の方法	授業の方法	10	10.2	11.22
	授業の流れ	1	1.02	
E その他	緊張	3	3.06	3.06
総計		98	99.99	99.99

②模擬授業をしてみて

表7に「模擬授業をしてみて」41名の模擬授業終了後の記述を示す。137項目の記述があり、A 教師の発話(41)、B教師の身体(21)、C子どもとかかわり方(36)、D授業の方法(18)、E 模擬授業について(21)に分類された。C子どもとかかわり方からは、誘導、子ども理解という小項目が抽出された。カンファレンスの内容や教師として、生徒として観点からの記述には見られなかった小項目である。E模擬授業については、授業で緊張したことだけでなく、授業の楽しさ・難しさ、教師ひとりひとりが違って自分らしい授業を目指すことへの記述が見られた。

表7 全体の模擬授業終了後の「授業をしてみて」の記述

大項目	小項目	実数	小計
A 教師の発話	発話方法	38	41
	発話内容	3	
B 教師の身体	行動	12	21
	目線・表情	5	
	態度	4	
C 子どもとのかかわり方	子どもとのやりとり	23	36
	誘導	6	
	子ども理解	6	
	子どもから見えている	1	
D 授業の方法	授業の方法	12	18
	導入の大切さ	4	
	授業の流れ	1	
	雑談	1	
E 模擬授業について	緊張	5	21
	楽しさ・難しさ	4	
	ひとりひとりが違う	4	
	子どもの立場で楽しんだ	3	
	客観的に授業をとらえた	2	
	授業がうまくなりたい	2	
	3分が長い	1	
計		137	137

5. おわりに

本論では基本的な教授技術の向上と授業展開力の育成を目的とする導入3分の段階的な模擬授業を実施した。模擬授業後にカンファレンスを実施し、「直接的」な対話の場を設定した。

相互評価では、教師の発話量、教師の身体の使い方が課題とされた。授業後には教師の発話、教師の身体、子どもとのかかわり方、授業の方法がカンファレンスされた。模擬授業終了後の記述では、教師の発話など基本的な教授技術、授業展開力、子どもとのかかわり方についての記述が多く、模擬授業の楽しさ・難しさ、ひとりひとりが違う授業となることの記述が見られた。本論では、授業構成力、教材研究力の育成は目標としていない。授業づくりを含めた次の段階の

模擬授業が必要である。また、本論の模擬授業は導入 3 分の模擬授業のため、45 分の模擬授業や、授業の展開、授業の終わりに焦点をあてた模擬授業による実践的指導力の育成が今後の課題である。

引用文献

- 新井紀子・竹内恵子・松田淑子・鈴木真由子・綿引伴子. (2014). 問題解決リテラシーにかかわる家庭科教員の力量形成：教員免許状更新講習におけるプログラム開発とその検証. 家庭科教育学会誌 57 (3), 152-163.
- 高木幸子 (2007 a). 家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討 (第 1 報). 日本家庭科教育学会誌, 49(4), 256-267.
- 高木幸子. (2007 b). 家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討 (第 2 報). 日本家庭科教育学会誌, 49(4), 268-278.
- 春原淑雄・坂西友秀. (2010). 「教職入門」における模擬授業が教師効力感におよぼす効果. 埼玉大学紀要, 教育学部, 59 (1), 55-65.
- 福ヶ迫善彦・坂田利弘. (2007). 授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法論的検討. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, No32, 33-42.
- 藤田育郎・岡出美則・長谷川悦示・三木ひろみ. (2011). 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役割の意義についての検討：授業の「省察」に注目して. 体育科教育学研究, 27 (1), 19-30.
- 堀内かおる. (2008). 家庭科教員養成における模擬授業の有効性：コメント・レポートによる相互評価に着目して. 日本家庭科教育学会誌, 51 (3), 169-179.
- 山本奈美・赤松純子・今村律子・村田順子・本村恵み. (2014). 教職実践演習における中学校家庭科模擬授業の取り組み. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要No.24,95-103.

ⁱ文部科学省 (2006) 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許更新制度の在り方」

ⁱⁱ高木は、まず家庭科教師に求められる資質と能力を 6 点 (下位分類 13) 示した。1 回目の模擬授業では、その中の授業構成力・教材研究力・授業展開力の 3 点について模擬授業実施後の自己評価と相互評価を分析している。2 回目の模擬授業では、1 回目の課題の改善をめざして模擬授業を実施する家庭科教育法のプログラムを提案しその有効性を示した。

ⁱⁱⁱ堀内は、模擬授業の評価や感想をコメント・レポートとして電子メールで送付させ、集まったコメント・レポートを翌週の授業時に匿名でコメント集としてフィードバックした。また、授業のビデオ録画を再生し、コメント集に基づく省察を実施した。

^{iv}指導案づくりは 2014 年の教職実践演習の模擬授業で実施した。教職実践演習での模擬授業については、伊深祥子. (2015). 教職実践演習 (家政教育講座 家政専攻) の成果と課題—初年度 (2013 年) の授業づくりとカンファレンスから—, 愛知教育大学家政教育講座紀要, pp91-98. 参照。

^v学生に提示した 4 つの指導案の出典は以下である。

野田知子. (2000). 食べるって何だろう. 合同出版. p72. (指導案は野田氏より提供)

増茂知子. (2009). 池崎喜美恵編著. 小学校家庭科の授業研究. 教育出版版 p158.

海野康之 (2012). 手縫いをしてみよう. 愛知教育大学大学・附属学校共同研究会報告書, 119-123.

(指導案は海野氏より提供)

鎌野育代. (2008). 中学校における家族の授業. 鶴田敦子・伊藤葉子編著. 授業力UP家庭科の授業 pp.141-142.